

# ワケ カタチには理由がある(105)

Shape follows Function  
& Taste

## ～ホーカー・タイフーン(Typhoon)Mk.IB



[ハリケーンと(主翼形状が似ている)→]

ホーカー社がハリケーンに続いて開発した戦闘機です。バトルオブブリテンが終わった後、1941年に初飛行しています。その外観的な特徴は、機首のエンジン下に取り付けられた顎型の

ラジエーターで、ホーカー社次作のテンペストとともに、同社戦闘機の特徴となります。加えて、搭載されたネイピア・セイバーエンジンはV型エンジンを上下に合体させたX型シリンダー配置のエンジンで2000馬力をたたき出す大馬力エンジンであったため、大径のプロペラを装備しており、スピットファイアとは別系統の英国戦闘機となりました。ただし、分厚い翼は、同社の前作ハリケーンを引き継いでおり、上昇性能が悪く、純粋な戦闘機としてではなく地上攻撃を行う戦闘爆撃機として使われました。なお、タイフーンの初期型は、操縦席の両側に左右に開く、いわゆるカードア型のキャノピーを有しており、米国のP-39戦闘機とともに、珍しい構造を有していました。

### 【模型について】

英国のエアフィックス(Airfix)の1/72のキットをベースに、3枚ペラの初期タイプを再現していたチェコのブレンガン(Brengun)社のキットを2個イチしたものです。カードアタイプのキャノピーはクリアボックスのものを使っています。両方とも、同時期にリリースされた比較的最近のキットですが、不思議なことに前者胴体パーツと後者翼/スピナーパーツとはぴたりと合い、同じ設計データから起こされたことがわかりました。



(中川裕幸 2024年6月)